

ポイント 1

訴えに耳を傾け、利用者への理解を深める

認知機能や身体機能が衰えてできないことが増える、配偶者や友人などの親しい人が亡くなるなど、老いとともに失われるものは増えていきます。そのようななかで感じる不安や怒り、寂しさが、「物を盗られた」と訴える背景に隠されていることは少なくありません。認知症による記憶違いを認められず、「盗られた」と主張することもありません。介護者が「盗った」と疑われるのはつらいですが、物盗られ妄想のある人の心の中にはそうした複雑な思いがあることを理解し、本人の話を否定せずにじっくり耳を傾けるようにしましょう。



ポイント 2

背景にある、過去の課題を探る

認知症になり心のバリエードがはずれると、封印していた過去の感情が露わになります。「義父母との同居で苦労が多くなかなか、夫に味方になってもらえず辛かった」「必死に働いて子どもを育てたのに、子どもは自分の生活で忙しく、気にかけてくれない」など、心のなかでいまだに解決できていない課題が、物盗られ妄想が起きる背景になっていることもあります。盗られたものは、人生で満たされなかった思いの象徴なのかもしれません。妄想の背景にある思いを引き出すかわりを通じて、本人が、過去の課題を乗り越え、苦しみから解放されるよう援助することが大切です。



ポイント 3

訴えが減るのは、認知症進行のサイン

物盗られ妄想は、認知症の初期から中期にかけて多く見られるのが特徴です。「○○がなくなつた。あの人が盗った」と主張するのは、元気でパワーがあるからともいえます。認知症が進み、認知機能や身体機能が低下すると、「盗られた」と訴えることは次第に少なくなっていきます。物盗られ妄想が減ってくるのは、認知症が進んでいることを示す、一つのサインと捉えることができます。同時に、横になっている時間やぼんやりしている時間が長くなる、会話が減る、表情が乏しくなるなどの症状があれば、注意深く見守っていくことが必要です。



「物盗られ妄想」に対する認知症ケアの考え方

物盗られ妄想が起こる背景を探り、利用者の気持ちを受け止めてケアをしましょう。

経験やカンに頼らない

根拠のある

認知症ケア

④「物盗られ妄想」のある人への適切な対応とは？

監修 里村佳子



社会福祉法人ハレルヤ会 呉ベタニアホーム理事長。広島国際大学臨床教授、広島県認知症介護指導者、広島県精神医療審査会委員、呉市介護認定審査会委員。2017年、訪問看護ステーション「ユアネーム」(東京・荻窪)を開設。著書に「尊厳ある介護」(岩波書店)。

認知症の人にしばしば見られる「物盗られ妄想」。認知症のなかでも特にアルツハイマー型に多く見られる行動・心理症状 (BPSD) の1つです。利用者が大事な物を盗られたと主張し、介護職員を困惑させることも少なくありません。「盗られた」と訴える背景に目を向けながら、「物盗られ妄想」の原因や対応について考えていきましょう。

文/森 麻子 イラスト/藤原ヒロコ

共感し、話を聞くことがケアの要

認知症のBPSDの1つに、「物盗られ妄想」があります。女性に多く見られ、財布や鍵など大事な物を「盗られた」と訴えます。家族や介護職員などの身近な人ほど疑われやすいため、感情的になって関係がぎくしゃくしたり、対応に苦慮して疲弊してしまうことも少なくありません。

しかし、物盗られ妄想は、記憶障害や思考力の低下といった認知症による脳の障害によって起こるもの「です。正しい認識を持ち、冷静に対応することが大切です。利用者が入所直後などで強く不安を感じている時や、精神疾患によって物盗られ妄想が起きることもあります。

いずれの場合も、利用者の大切な物が目の前からなくなっているのは事実なので、「盗られた」という訴えには、否定せず、耳を傾けましょう。ただ、物盗られ妄想の場合、なくなつた物を見つける対応は根本的な解決にはなりません。「盗られた」という訴えの奥に隠れた思いを探り、受け止めることが大切です。介護者が共感的に話を聞いて、妄想が軽減されていくケースもあります。

物盗られ妄想のある人に、してしまいがちな対応

【介護者が先に見つける】



【本人の主張を否定する】



「置き忘れては？」と言うと、利用者は訴えを否定されたと感じて、さらに興奮することも。また、一緒に探して介護者が先に見つげると、「やはりこの人が……」と思われるので注意が必要です。